

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

*Johnson & Co*

*London*  
*Printed*

7

尾澤翁浦主人

存心集

孝西庵

9/29



昭和十三年九月二十九日  
木村貞一殿寄贈



家師孝西翁の翁を心して存心集なり  
心を盡すは人の徳を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり  
心成るは身を尊ぶる事なり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.







葎居集上卷

春之部

年内立春

冬をきて春をとりて年の肉をまみやらぬぞとて

冬をぬくら春ふちりぬくをわりの下をみせて梅咲ふたり

そとわりいんそりくとおのつら春のたし福いあまきとらん

元日

初春の人のつらうい今のせむむう一照つらや神あよらん

岩屋戸の社せえて初春よりゆりのけの長鳴のた

春くれいのけりりらうまう一さふわひつとおのんんけ

きのせふさるまをうらむおんひつとそそのんい今おとすれなり

立春

早くてなほまきふあらしまる。春をいぢめぬらん  
 一と時の限り一はくはいのねらん春ふあつて人のそらた  
 志の目のまぢむらんこのころあつて人のつとふ春をたのま  
 花やうふ春いららん城あらしめてをれ姿やそらんらん  
 何より一束の髪とあつて今ねゆる年まきくまあむ春が  
 あつたら春いのねらしまき。おと人定むれいのとけうらん  
 大君のこのりのまに人のこのをさくあひく初まあうね  
 春はねあらしまのつてやきつらんおのふはとち一はねの雪  
 やりたをわらうらふらうら雪の初ままつふいよふ富うね  
 さくらをハ花といひとせの人の春ふうつるハ梅ふとあれ

初春梅

立春霞

初春鶯

早春梅

早春山

家々翫春

春の始の歌

初春祝世

難波より東ふくくりや。時ふ府中のうまやめて春をむくして

春きぬとらひて何をうけきえま。おくれぬ梅の花一さうハ  
 春くれハ山の若き人ねやらん玄年のまきさのりきふハ似ぬ  
 初春ハ子たぐくくくみきくしりやいららん。初代おほえて  
 世ハねてこの一き時とぬふらん春をくみあやうてねうを  
 日のよとハ今ハ初世の初たうらうらうつに春をくみこを  
 春くれハ花やまきやとくハはきくふ世いたの。さのつきんハあ  
 旅のまえあつてくくくきを春きぬとらひをうらうそのハけられ  
 初の日とてねりくは一年の初とるねハはえあらん  
 うらくとちくく雪の初の日とてねのふみんくくうね

子日

子日霞

初春の子の日の野辺のおよろしき生ひくめのこまことり

野子日

野辺ふ出て子の目をすれは若菜さく小松芽してふひるれは

賄弓

りやよこ時るのよ休の補弓れりり何よーに集よまらるを

摘若菜

大肉のやゆと心をまきれーのためふひくやりよの補弓

若菜多少

おひ出くる野辺の若菜つむんや春ふつれてや殺まきりん

春雪

とらふにつむわわのねすくねきハ平のたらなぬ小女ぬらん

霞

春ぬハ雪ふあつてやおのつらきものちりき風吹あへに

霞深

くつせよの人のふあつさ弓春いのきさふたねひうれり

霞添春色

くみよーていよふ似てやとねとまといハのハのらん

朝霞緑

春ととておのきささハ見えぬとまむれとあらまのめ

夜霞

朝日さいやぐもるに似れと色のうらうそまあちりる

市中霞

月のとつ花とおほろにありやちりまやあたるりきぬしむ

連峯霞

たのつらうらうとよまのしーはくまのころの市河ハ

海辺霞

はらあつてのすまぬ雪とあなれと遠きハ見えぬ春の山のえ

河霞

位々のきーのちらばたぬ日ハ松とあまて風を吹あへぬ

鶯

山河のまのめりしをたつぬれハ岸隈の水の烟ちりりる

鶯覚春眠

つたをり植つる梅ハ鶯のきさくみそさうぬおそやけさや

朝鶯

鶯のきさくおとさんハいつま傳のおいらーてよー春ぬのやー

夕鶯

春くれハおのおとさうをさうり唱おこされてねいこそせぬ

野鶯

鶯よ如の初音私めりりしまりしたぬらす花辺の竹村

閑居鶯

花う先の梅の枝まて木つとひてお庭のほふ雪のふく

窓前鶯

ましくらぐ梅や海まひさくらの竹よみさくく雪のたえ

隣家鶯

隣まてきてし鳴ちまらうらうらふ梅あきとちをうとまれおら

行路鶯

又みらんあへ申くつてのあうとをとおよりぬ梅ふ雪のころえ

伊勢國朝熊山のありしをのころしりよ所あて鶯の鳴を聞て

玉くれのをうららのやうりみくられとまひひねぬ雪のまき

梅

くよとほたぬるのまはすきとまうー雪うそのころえ梅の花園

くくはまのまふひうれまて最後のおいひたうらぬ梅をこぼ

世に鶯宿梅とりのを庭に植て

室梅

鶯の宿てよ梅を植はまてお庭ぬらすつりぬわてぬけ

梅風

今の世の人のくう室の梅うをうらうそくすきまこいようれと

月前梅

梅さけハる雪の外ふ吹さる風さくをーきとちこそすれ

夜梅

雪の速ハ雪らそい白く梅の花まハ月あはるようそま

夜梅

梅うをほくー先ていさーうてぬる雪の神のんちこそすれ

夜梅遠薫

梅うハ雪の梅り雪よそそ目ふさるようハ雪ぬらうれ

水辺梅

梅の花つごよまつくのやうれはゆよまこふ雪よ白あこ

行路梅

ぬすりの神さく白く梅の花はそうぬるふ雪をーこころあ

難波小ありらるころ山田大海うらうらう歌をせふたをせらるせうせうの

けふうらのそ花咲まてハぬれとつちをええハぬと有らる返ー

梅見よまのねりり。時ふ女への物の音あそひりるを  
大うゝハねあそふ梅のさきこりけりめよりたゆく花の言へ

鳥驚惜梅枝

翫梅

折梅

梅有遅速

老梅

紅梅

柳

梅よりみ望よりみめてこきハありよ花のたのめさくつを

望のきこてあく庭の梅の花おららうりきこ人ふあくる

又ふゆんらつてききしめ。望ハ梅の友とや家をまららん

をまにふくそとゆ。梅のふまはハねすくハ一枝をららや

うたのえゆしうねふのまふ梅でおくれさきたつを香

あーたてをまの梅ふわうえさー咲く。花を人あらうた

白きたふのをうを先つ。梅のこのをえい海ふら花しをぬ

あそねら信えうねぬきを花よりみやねさくし人のりらん

霞中柳

柳枝鶯

若草

松下若草

春野緑

春草

摘草

路春草

行路春草

風うらたねい柳のえさよりや春の葉ハをぼるらん

梅らりいりめうらちやとらうふたう柳の望のりる

若くははらふねやけあそねほゆらうら花をちらら花めて

花のさくしうらち花ゆーうねぬしりてうらうら春の若草

月ふうときこ小松まの下のまねをさうらあひぬえさうね

きのよとて古ままりをせしうらうらにまを野うらんとてぬふき

うら若き秘そそよふき春の若草をねハやうけ海ふすまをたじ

春の望らハ小女まうにたをむれておとねつむや葉はえねを

わらうらうられハねらすすもれまよくれハまさく春のむねを

春の望ら若草のみうらに感ゆあくのうゆ。千人のを路

野春草

乃多た心をわけて春の野ハたのりちゆり林見らるあゆこの  
 去まふせんものんあに春の野つきてハ捨る草のいろく  
 ぞんれと野ハおそしぬふりくをくたててつをぬぬせん  
 たまー野ふもえて人ふつまこと又くこあし草ハまらり  
 日のえわうんといくと敷うけハたふおかれて草そりえらる  
 赤むれてたをるまらひんこうれハ焼く人ふえおされり  
 折る小藤そみ申る小松原のいろとさら山あこや常人  
 柔ゆるく人よりさきふたつよひるんたしき原山年蕨  
 春の赤ハ氷とみえり新れまーぬるこやすらん月のをちれ  
 ほのくくし新ろそあち春のよた月のまへやたらうのあし

春月

深山早蕨

原早蕨

樹陰早蕨

竹陰春草

朧月

霞中月

春曙

故郷春曙

春雨

連日春雨

野春駒

山春駒

春駒多

さやうきを心とすたる月うらみ春のををハのうれさりりり  
 春くれハ霧のまふちをちして月の新さ人のくくつらん  
 こすすれうハをぬれてせのたの藤そふぬる春のぬ灰  
 りいーらぬ春のあそれいあささのをりーれこそあぬあらわの  
 ちたませー花と柳のわのまをちするハ春のぬろたあうた  
 春あふさひーくくらひきのふりよぬるさくうらた人ヤとをぬし  
 いきねよき野辺のさぬうぬけしげるまあぬぬれまきとちちて  
 ねひつてくいつまふいん申し野うひの駒よいうたのーき  
 野うひはとちぬちふららし春ま浅馬くひん小今ねよちり  
 ちぬのちハ新ふまうてのまのくのぬろそねー野うひ山あ

雉

蛇くやときんろくろくぬし妻さひてかへきさのきんねぬま

夕雉

おしめあれ一村五のほろくくとちくやきくはめくくれのみ

雲雀

あゆえんふのさうふちのひのひをうさつる時人のをひは

雲雀思子

るんせそき雀のはきくむういはせさぬぬくこにけきさか

野雲雀

まあつ春めひをうのさうまへハ野辺の抱ひふをえぬらま

雲外雲雀

あこちのみ仙けちよきまのひをうかきまのまをまてまこけいせぬ

伊勢の上野よへ

そさくあつるさ雀のをほちりさの上野めをときぬら

呼子鳥

さまはろそてさのちひぬまうそれいんうよこさるをえくえらよ

志麻子の國よて道よ日の暮くる折ふ此鳥の鳴るるを聞て

花

うほまいお家人の何ちうんぬまていあを思つてむら

さぬていんぬらひくら山さくらさけいさうつれ花ぬぬの

あてそそうこころぬ思く振らふそをう一夜そ何とてまじ

侍花

春や花さくほくふかうぬもよさくつれすにやきぬく

山初花

尋すよきそころそそりよを初みん山ふにまへさふらら

山花初開

まこさつぬ花を尋して山守に一束ふりまのね振りのね

山花盛

はこらにきんまぬまぬさきよせて山をそ花のさうりちうなれ

花盛

春をそうれうらうら山橋花のさうりばますていぬらうら

あつらひさうのりふたうこのせぬ長保ぬる花さうり

所々花盛

ちらぬまを足跡さうちまうらん花のうつて知人のまき

翫花

江戸みて飛鳥山の花見も亦て

花さくらあめぬをうらうら又たくれの花をそおのり  
まよ又て名は同一花も風あつまをこめの神さきこく  
ゆるりぬきさるのゆめいひちうて花よりこむ春の山  
のけしめんこそゆけうをむのやうのあけ月おハえねと  
花のうけ一人をてハわりりのちちすあつ月のあけ  
春の色をけうまの花とくらわれハ氣をほきあまの月氣  
ちりたそむ後うられふはそよ風のりきこたやいらと  
をうらぬちうひもあ春風ふちうめめてとき山花  
さくら指ゆるゆるの夕あうさめちうすらん人の心

花嵐

風前花

春月比花

月前花

夜花

行路花

花帶露  
都花

川辺花

谷花

社頭花

田家花

杜花

古寺花

廊中花

花あふぬれもそとられぬ花ハあまらひく起てん  
あはらふ秋の春いよきさくくわくくちうて花いさく  
暖つく大川の辺のけくらふあめらのゆくくまこの花  
ふさくらを谷のうらたうあやうさめたれて程をうらとら  
ちをちの神のりのきふさく花めらうくまうハのれさう  
とまよきせふこころをけらぬせハ忘埒の花を神ハちうは  
ふあく機つゆよふ川ゆひー振とたよハ花暖ふりり  
のくくく見つあゆたハ是よりふんつくたの花のうけが  
きそくれくうーや後の山風の今ふきちうすぬ寺の花  
はくくいのりよ花をさきまをせてあふをらぬ又花のぬ





野遊競先

けしうの陣を野れせおあききと人よりさきおゆく

野春真

すもれ草をまきくほふたり野れおのびさこのほのきくさうく

桃

梅つと梅のおそき花のまふりりいさきさう春のいろとて

りのふ梅と梅のいろいふらいろ色くさうさうさうさうさう

むぎの國騎西羽丹生ちこりまあいろをさめくさのほりら。時り

桃の花をうけてよめ。

梅ちうへし梅お梅をこきまかせて田舎へ春のまことちうらり

難波の桃谷よりよめ。

春の花のふきかたふらあきいろいろのいろさうさうさうさう

蕨

はさくら先をたきまきさあおのちのまぢらさうさうさうさう

蕨菜

さちこりやよつそくらめ屋のみのまふつれまきおぼろせむ  
人ともひらりおりに住ちこり杖いつを先のうみりら  
はさくらふらと年と宿をとりれりお行かせんすを作ら先  
梅さく吹いのあらははさくはを先を花のこのみとせん

幽居牡丹

つれくらくらりの梅さる春の目よほくの花を先ひうね

莖

はされ草咲ててたれたんら春のおとちうさき

路莖

布くつらわらいらふつとた先てさう何せんたのすうね

田上莖

すきこりいれ残り門田のすうれ草さうまはらう花のさう

菜花

山吹の花をほきさうむうへの畑のねをやすくぬらうら

蝶

歳たひよさうのころえてお蝶の又きさうぬらうさう



藤

ちひすくふ庭の栞の若たさうふ何れらぬあはれ花を咲けり

庭藤

庭宇半のうふらをとむらさね年々若のさきまきさうら

池藤

川ゆいし柳の若あはれ花さけけけけけけけけけけけけけけ

山松藤

新うえて花さく池のうらややと木まの若ふけけけけけけけ

松上藤

山松の枝を傳ひて葉はまき谷るの若の若さうらね

樹上藤

まつ世ふうれうらえねつうけけけけけけけけけけけけけ

挿藤花

うねちりく柳ゆいし花うらえちよ木あまこの若の若さ

競藤花

け紫の長さたけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

春風

花のへかたのきさみけけけけけけけけけけけけけけけけ

春閑

ぬるこゆく春の始ハ風ちれやさむき限りの氷ゆきとく

春沼

あうらの八重山栞ちらせくハ風を色さぬ園さハちり

春田

春されハ小埜の沼ふらう鴨のたぬのまきまハこさこさ

春田夫

種けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

春木

残ハ今ゆく福まくぬり林の田をこけけけけけけけけけけ

春植物

春されハ花々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

春鳥

あうらとみえぬたのうの花さきまきまの春ふいぬぬはま

春狩人

何ちうぬ庭のこちハ春のまきけけけけけけけけけけけ

老後逢春

年々くちをむとちかむをきくらん  
あきつりおとと去年ハおれひーをきくをん春ハ花すらん  
おれすらん花をたづぬる旅ちらんその故のふくのうらほ  
申すねましく志つの業をそ一年のけ世に移りそく先ぬらし

春旅

春祝

夏之部

首夏

首夏風

首夏新樹

新樹

竹の子のおつる根根を尋つくわらんききよ夏いきふらん  
夏衣まことかみそりぬらんちくくうらき被ふお風そく  
花ふのこねつらん人の心をい夏のりのとハ風やたまらん  
木のつらら春の葉を吹りちて風をそくうよき夏のらんきに  
夏のまて志らんお花をりつるるふらんおひのひらん枝おらん  
きをけけー相のまをのーとせふさーんらんらんおひふらん  
山妙らんらんれきハ早苗ときさーんれま葉を切あららん  
人の世を夏のらんきふらんらんのけらん木のま葉あららん



籬卯花

うねりく引申下りし卯のふの垣ハこころこころううたを

雨中卯花

ぬふらのうけあひまみちあらう卯の花垣ふぬのみこころ

山卯花

春さきてまよきやうをたのほハ卯のふ山をいこころまうふ

山家卯花

山家の卯のふさハ冬さつるまふらうらめへこころうら

名野卯花

たはくう城さつしてほすうとをそのうに卯ふ暖ま玉川のま

閏四月卯花

うつき暖月あらうたのつうら花さくころよむのこゆら

竹子

隙より垣をこえては咲きハはをう先たるそのの竹の子

さくちようゝ窓の竹の子はふらうけらハ友ハのせうら先と  
竹の子ハ垣のわのまはまらうほらうてまきやうんくよのたまふ  
わらまこふらよたよません竹の子ハ世にうかつおひほらうん

垣笥

井の子をほらハ布らにんて粒とけゆる根をまいつ先そ

里笥

いつのまふわらうむれふぬうれうすくぬぬる垣の竹のこ

岡笥

竹の子をほら出くる山さふらうをつらぬすまねかせん

新竹

其はと今年ハぬぬ山はうらつれもてくる山竹の竹の子

新竹風

新竹のひをそそくにめてぬらうぬのかけこき人のむうれ

窓新竹

とくにのひぬおぬあ年きハおちよりさきさそのの新竹

垣新竹

お竹ハたむきわく小風吹て友のりきさそ涼うらうら

待時鳥

こぞを極し言ハさくらくけは友ハ年新竹をおひぬらうら  
お竹の生くる垣ハおすらぬ程さそをたういよせうらうれ  
おてハさそいよくを先けさるる言ハ秘あんほまこぬし

人傳時鳥

初時鳥

暁時鳥

曙時鳥

夕時鳥

夜時鳥

ちくれいきくめのこして昔よりはつりーの時鳥の那  
 ほくきいりつれちーけははるすてまーとにや  
 よんづてほらんとおりの友よのす初言をこーけさうた  
 りつとみうらなめのを子親初言とらん人のあらまよ  
 りさきけハ初言ちうらうまのこおひてまー山郭ら  
 はういしてのり友をそはくばし今言はるう初言  
 待言のまふりくはまさらぬははくれーけの山布きん  
 写捨る束あねうらや捨をふやうしうさの山布きん  
 まゝれていんうーまくれぬすふ人聲さうんほくきさき  
 友の束のこーうきさけふ世の人を待せぬおひの時さか

連夜時鳥

深夜時鳥

夜更し時鳥を聞て

待言ハ初言をこみーけさる今言もちくうまうらう  
 歳束のす待言いんの時さきわくぬとまへえやにわら  
 さよほくおひ申る小思ふさなされておりのきし杜うた  
 とぬ人を待よりさいハ時さるまふきうーとりの一さ

時鳥數声

時鳥遍

山時鳥

旅宿時鳥

思ひ福の人を一つ免てせくらのときさうたてさる子親あ  
 一まのふらさうりて福うんとすれいあこほ郭公あ  
 布さきんきうくとこれよりちんひうやほほりん  
 かみー人を尋ねておほほえぬるのけりの山ほくきん  
 ちん枕あそ旅ちうりほくきんりささううてのこらひて申

鄙時鳥

時多初の初言しそくししちの長河を多ひくし

社頭時鳥

ほくそき舞くき山枚さく夜涼ふあふらんしん三輪の山枚

古寺時鳥

あしりしけ古寺にきてきけハちのひ初涼の山枚くきん

高野山の古岳法師の歌をふまねりるる時小函居時鳥

一あふたるふりたれいほくしんちらてやきさく山布きん

閑居時鳥

ゆえそし友とちはいよるハ里をたぢまきし山時鳥

山家時鳥

今日こそハ明るくしひてしん人の歳よと先たる山郭ら

えんほそ川杉の村立とりよあさうりて時鳥の鳴をきて

初まハいつこハあれと夏を儀ときくや神河の山ほくまん

名所時鳥

時多とそ山やたれらすちりまて初ふハちうぬ初言城

旅宿橘

をすハ志まむむりのうた々のそのの枕ふこのをくしちそぬ

盧橘子久

檜にりふとそよおとそこのうの又花そちふをつきふりり

早苗

うくとそちちやうハおひぬ早苗そそあ日の中れゆきぬれ

杖うりて今年れこのみあの世の初縁あふあハ極たてふりり

符あくとたれハやうてさぬときりふしぬさき初う業う初

ねりろ成りさそそ採とおひひりう夕巴ハあう急海川り

極し田れふふいとうてくちぬしりうちてたれぬ五月夏のあめ

ぬきのううよほよ早苗時初れたまくるたのこがらん

たれはし何のあや先ハみえよとゆうのうくまぬをせむしはし

井れみちう初れぬえぬうきしてぬ又わある五月夏の初

五月雨久

首蒲

早鯉早苗

水齋早苗

採早苗

連日五月雨

五月雨漸晴

河五月雨

梅雨

梅雨難晴

庭螢

叢螢

風前螢

五月雨のそねぬしつをけはりのこくはよりて歳日へあらん  
 たる者みしひうそきよとみ月あふよとれしををうけおはる  
 めりぬに晴てはなぬやう水のあつとさうりやうら掛はせん  
 山河の夏の里人さわりこのさきとれふ水や換らん  
 くらんまうと梅あひにきこらうらぬのさるんを  
 りしせきにぬれぬ社と志こもつものくひとつみ月あふの者  
 ありぬの日をてわれはまおさくぬれぬあふををるはび  
 五月やこあやをわわぬ庭のあふあふよ螢のつぎとよ  
 葉はくまをさるまはまむらのはのさの螢やちひさうら  
 河きりの杵のうらを風うらをあよりもろくちの螢が

月前螢

水上螢

月下水鶏

深夜水鶏

夏月

夏月清光

月出涼風来

夏月涼

依月夏涼

月の東の螢はさうすられと飛うよさぬハヤコウメ  
 流れり河のうきとふすうりていとぬ螢ハ新のりさよう  
 しつとちと世をなれきておほゆるハヤコウメ月よあ翳る  
 けつ口をりやたくとみ翳あくあ守の森にをねとさ  
 涼らふ月人をとこぼるこ暑きふくぬ夏の夜は  
 小女子あつ夏の夜のうらみのあつてふき月のうけりぬ  
 夏のよのまをいしよとあつちとさきをよりつ向き月のま  
 夏のよのまをいしよとあつちとさきをよりつ向き月のま  
 月影ふたうわてとさ涼られやうの夜風ハ吹てぬん  
 夏はよひさうらうら月影ふたうらあつしうらうら







夏鳥

夏虫

夏獸

夏木

のりあしく鳴きあつし山うらす夏はすこちのをらうの松原  
 玉あし何をちきうつて夏虫のひあし何さうあをいやくら  
 枯風はつちの庭より吹やらし世にあつら世にこほらきよの鳴  
 煙のちあしよりらふ故を火の火のうらさた夏のよえうた  
 去さるる大海のうけふあをうせて古ひらえうす何をれ大あろ  
 又さしあせする馬の武士りのうられてあへく夏やあひさ  
 花よりちう春の梢におそりうきさむるに早き夏木えり那

秋之部

立秋風

初秋

初秋朝露

初秋月

初秋風

人の身すすくくそぬみらるあう風ふ杖えりうり  
 めらるるにつれてやきぬる白あし風は杖のありさとちあて  
 えりう杖のうらばたやうせてけおくあそまのよあに似ぬ  
 楓樹のほりめていつくころうそ月のえり杖ふちりり  
 きよの述はつる風の音さえて杖のりのそりよいぬぬれ  
 人の身あふてや風の吹ぬらん杖とまきくよりうたははちり  
 涼しさはよりとハワとつとさき風の音よそ吹かろぬぬれ  
 暑のうしなを杖めすしきふううのハ風の力あうりりせ



萩凡

萩

蘭

朝顔

垣朝顔

秋七草

草花交色

草花盛久

伊香保(行路小廣き野ありて秋草とて咲く)

常らてなまこころいへば萩とて下なるりの萩めとてうぢか

いろく小葉とハすれと萩の葉の花のみきこは萩ふとあれ

かこあらこころいへば萩の葉のさきよおらとすれ

あやむうらふあうらにぬきさき萩の葉ふゆるなまこころい

たらちよの萩のいさきおとをぬきひらぬぬの萩のふ

くこころぬきぬくこころいぬ萩の花を垣をゆきうけてさく

萩の野のこころいへば萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

くれり萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

武藏國芝とて萩とて

やうらひてこころいへば萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

こころいへば萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

萩の葉のさきよおらとすれ萩の葉のさきよおらとすれ

夕露と夜露

朝露

夕露





月前遊獵

月

小春の狩取さのるよ日多き月ありきよふらふらちかく  
 はらの戸ふまらちうの人の心を八月とあをれとさしやうふらむ  
 月のうさを取らくあうよ新うらて月とおひをこらうの  
 雪よ月よひとぬりにたり秋はすき風さうのうを  
 月まゝの夜をうらふよはるを知らうけ申くらの名さ  
 時のまらねらうくれり月氣のさやらきまふあやうは  
 夏よの涼しとらひ月氣をぬきおと秋やちうら  
 月をこそあまをれは味きをあきよひうのえおをて  
 庭中の松をえなれて月氣は今こそさうまの内にまて  
 夕ぐれのたぐくきまわきまてうまてといひつる月とあふらり

侍月

月漸昇

月の歌の中に

見月

船中見月

老後見月

獨對月

愛月

欲馴月

耻月

忍月

月増光

明月如盈

月を衣とてきぬ人月を一まきよみて今をうらうん  
 さす新の明名のおふ毎うらて大ねまよの月をさうら  
 夕月ハちまひうらうとくれをの味えはをぬのうけ  
 んあてといえはうら月氣こころぬるあそおをぬる  
 りんねぬ月のよけのくせそり妹はうらふらけりよとん  
 やうり秘て月のあよはねふらぬがの習いと秋はぬらちや  
 恋あふまよよあをるを面あくぬのうけなうと送る月氣  
 たまやせんあやなむむいしゆて月とあまをさうらうら  
 夕あやあ風れんふ月のる秋はうらうら新やちうほよ  
 さえはる月の光をさきていひぬあきさう心ちうすれ

上弦月 参として人のうろせハ夕月ハよのゆく長く思ほゆるら舞  
 弓張月 時のくるふ二日月と名ひしとらさるるうとてやぬふり  
 十五夜 今なるこそ杖の伝中への月の起てうらやみよのこ  
 八月十五日曇りられハ去年ハ夜中より晴たること思ふく聞ふふとて  
 下弦月 よいふ満りぬいよるれくうくの惜きその月の卯  
 九月十三夜よふんく

月下奥 今の波ハ存物のそぬをきけ月ハ影はのあゝのまわけのそ  
 にはほり月にされて杖のよを一人のまみたりるきうぬ  
 たりろく月ふむひてほくたハおそやうぬふ酔うにたう

風前月 松風ハ月のあるよ何ちまらん喰もつらうり影のさやけき  
 雲間月 きららうりまらう月めさぬよりそつしの杖としそま  
 深夜月 くらぬらうりまらまされ茶あらてこふふまの月の影  
 月漸傾 文ぬらうり風がよむ月影とまをばして秘ぬハ秘けん  
 残月 きぬくの神ハその月影ともくまらうれまらまらと  
 山月 ちあらうりまらあねのまらて西のよふ月白とゆく  
 野月 知人とたりの月さくおさひて海らのけハ世は似さうらり  
 旅泊月 中あらうりまらまらたむさう野ハらまらハ山ハかまれと  
 浦月 あらあふうりまら月をこも母ハ山ふ月明しそらうらそぬ  
 おんよくまらまらほりまら月影のぬらハ浦とまらそらにたう

山家月

深山月

竹窓月

月前鳥

老人友月

依月客棗

月前情

月添秋情

月前述懷

おのゝ庭のなま〜月影のみのきつらちる。杖のしづ〜

なま〜ろち〜さきうめつ笑山のあやうさちうふ思月とて

月てれい雲雫の定〜ぬみたりいさ〜村竹く竹のうらりて

さやらさふひ〜とやあよ森の悠たや〜の暮る月にち〜あり

鳥さ〜あつき月夜はほぬものをさ〜ちのき〜人の世の中

月とそいねさ〜くの方ちれやをていりつ〜ふひ〜い〜て

さ〜とねと月ふ〜人のねとつれてや〜淋き杖のよ〜うね

つ〜と月ふ〜いてさ〜悲そ杖のき〜のぬ〜うち〜ら〜ん

花を〜る〜つ〜春の諸人を杖の月よ〜そね〜あ〜ら〜ん

たの〜ら〜世の影〜やを〜ん〜ん〜ほ〜れ〜い〜く〜る〜悲〜平〜の〜月〜影

對月思世

月雪花の三百首を三日よ〜り〜る〜中の月の歌〜

世の中ハおのたらぬ程とよ〜と行〜れ月のうけを〜る〜あ〜ん

わき〜と〜う〜海〜ふ〜ら〜る〜月影を何やち〜く〜ふ〜う〜て〜〜〜あ〜ね

あ〜ん〜ん〜ん〜の〜あ〜る〜ふ〜り〜に〜袖〜ん〜〜〜〜月〜そ〜ら〜ら〜ん〜れ

あ〜ら〜ん〜ん〜あ〜〜〜〜日〜の〜中〜の〜こ〜う〜け〜と〜ぬ〜る〜月〜の〜ひ〜ら〜ん〜成

月〜つ〜悲を〜ら〜せ〜す〜ま〜あ〜ら〜〜〜杖を抜山のお〜ら〜ら〜して

たの〜ら〜ら〜氣〜ほ〜ら〜き〜悲〜り〜も〜も〜ん〜し〜月〜ま〜あ〜ら〜ん〜門〜は〜ひ〜〜て

ら〜〜〜〜の〜こ〜よ〜あ〜ん〜ん〜ふ〜た〜れ〜ら〜〜〜〜月〜の〜影〜う〜ぬ

あ〜ら〜ほ〜の〜懐〜ち〜の〜う〜ん〜ん〜〜〜〜月〜の〜あ〜ら〜れ〜は〜ひ〜さ〜ら〜ら〜ら〜

残山のこ〜の〜な〜ら〜に〜旅〜ね〜〜〜世〜り〜ま〜〜〜ら〜ぬ〜月〜を〜〜〜



厚うみに使されてハ旅ねあめめくせん時あうら

聞雁

ほのくときけハ怒りき厚うら杖の氣ハ持ほるる雁

老後聞雁

をてまこそまきけハをば人うらになれとそちこそせね

海辺雁

あゆちうらこきうらハ時ハ振田一方ハうら厚うら

山東京傳う古き事とよひたせらる時ふ妹とよう姫瓜うらう子

ねとめてあうらを見てたれひようつる事ハひやりられハよろこひて

草袴ハおのさきねうらうらこねとらひたせらるうら

何ちうらぬうらハくさハ草袴のうらちのゆくふえはうら

伊香保の出湯あうらとて出とらあうら

ねちうらけさのまうらふえはせハふら山のをねうらうら

田家持衣

かゆふめく残うらうらよはとまきるる虫りのさめハチ

鹿聲交持衣

杖ハらふさうらうらうら麻のよハゆらよきぬとまきうら

栽菊

下せく花の白菊植とてそのころよらまきとらうら

菊花色々

うらうらめさめさぬくに笑あせて菊のふそそ入まるせられ

園菊

杖とわめ家を作りてよの人の人をまきくふはくす杖のね

野亭菊花

ちくさけく杖のやまうらをうらうらうら菊ハハ何とあなし

紅葉

花よつけみまにあつらう春杖とくうらんの空をまきのせハ

春ハ花杖ハみまにあつらうて杖ハ初ハまらうらうら

杖のまふ山の木のまきうらうら申くまらまはくならうら

待紅葉

深あぬみまの杖のあうらうらたきまんとまらまらうら

夕紅葉

夕紅葉の時のぬのぬれ色に夕日さそてさくさく

紅葉輝夕陽

時より赤あやうらふ小葉あそく杖の夕日ふこくれます

夜紅葉

うさむの月ちきひのゆみちをくろくそ東のよきこりき

紅葉狩

紅葉狩れふ入ん目くまなハた山の森のよみ入ゆく

行路紅葉

紅葉狩枝をうくくてあそむるほをまよもあふり

挿紅葉

舟うらてあゆむるまきくまうわの滝の紅葉ゆゆく

聞鹿声見紅葉

紅葉あそをわてうさせハ袂さくうらくれるるの急におふり

山紅葉

紅葉はえす麻のむく福ふきをたれて紅葉のぬにふきあひ

山紅葉

古さく小冬はうらうら山脈ハ杖ハ紅葉のみきさふり

楓のこのいほそくく紅葉をを杖の山へふみきたり

深山紅葉

尋らる山は紅葉の紅葉を紅葉はくそそ色ハ増ら

山路紅葉

秋のをうつりの袖ハ紅葉ちれ杖の山路ハみきさ

木曾山少

山の栞むらうら紅葉して杖のさうらと世はあふり

きそとゆく木末をこれハ紅葉の杖の紅葉を杖ハ

大木もや紅葉してうらの山はうらうら紅葉の紅葉

上野國ふくくけの紅葉を

ひまふくうらふ紅葉をうらうけ二つひこすく

林紅葉

植ゆへ林のたのみの紅葉をうらうら紅葉の紅葉

谷紅葉

とちちの細谷川あちうしけハ杖たひせる若枝の杖

こあろせハ谷の紅葉下思て紅葉はくあそちう

河紅葉

ももちそのちろしくひの谷川ハ綿をさらすおちりり

水辺紅葉

ももちそのちろしくひの谷川ハ綿をさらすおちりり

高野山の古岳法師の歌をよまぬりりるふ函居紅葉

人のちきと度ふお招に琴ひきとあらうの笛ふちる紅葉

名所紅葉

むいより名を言尾ふきとこれハ紅葉の指目こそ及たぬ

難波十二景の中ハ無賢紅葉

ちりぬりのちとハはのちつくらへ仲ふみ葉のほちりり

都ふりりりる東福寺あり

うらちを風吹あつてられそのちちりりるそのみ葉を

凡前紅葉

たきハ且ちらん杖のみきをハ山ハ風吹をすら葉

楓

時をうらりりり若くて杖ハみ葉のりりりふちり

晩秋虫

たき感つりりさせてよちちりり人のちきむや借りてちり

暮秋虫

はのをれてちちりりりりりりりりりりりりりりりりりり

暮秋月

ちちりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

暮秋紅葉

杖のりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

秋雲

とんすれハいせきちちりりりりりりりりりりりりりりりりりり

秋霜

夕暮れハいせきちちりりりりりりりりりりりりりりりりりり

難波十二景の中難川秋釣

川ちふんちりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

榛名よて猿の鳴るをききて

秋鳥

草花 猿の木の秋の夕ぐれにあそびをいへりしうらむちの  
きよみと春はちうくうし百あきちうく福うひて秋あきさる  
もまぢたのちうくとまてはうきむつくるもむいづうく  
まてて秋く風ふむうくと山うらほむところとあうよむ  
春はくきをうとあうあきまはとちふううあ秋の山さ  
まてて山田の唐の庭なきほりきあよになんききて秋く  
いづうよみとせんをうにまひひてはもぢたううく名よの甲  
まててよぢうれと旅の夜のをうんさハ秋の能すうに  
あそびたうる世甲のまの抱うねうく神ふちちうきうのちく

山家秋鳥

田家秋鳥

秋狩人

秋旅

このこある秋のそん後うううううわせのよひまわりして

冬之部

初冬天

初冬月ついでに雪をうらむ時節してはふ定まぬ冬の時うね

初冬時雨

秋よりぬあつてうらうらしやえさえてあつたうねぬ時雨うね

時雨

わらうにやあつたれとまてまのうらむぬえをいひてやうね

妙の女うときあつていさぬを教なり時雨ふわいてほつたうね

けろりたまつてとまてまのうらむぬえをいひてやうね

ほつたあつたまのうらむぬえをいひてやうね

和田の山よて

月ハ晴て時雨うほつた和田の山林さむぬうらむ時雨うほつた

時雨陰晴

たつたあつたまのうらむぬえをいひてやうね

時雨随風

今よりしきうらむぬえをいひてやうね

夜時雨

風さうとあつた庭のうらむぬえをいひてやうね

里時雨

まをうらむぬえをいひてやうね

遠時雨

まをうらむぬえをいひてやうね

行路時雨

はちうらむぬえをいひてやうね

名所時雨

名たうらむぬえをいひてやうね

落葉

地なる並樹の小橋たちをうらむぬえをいひてやうね

蜘蛛苗落葉

めつらうらむぬえをいひてやうね

霜

まをうらむぬえをいひてやうね

暁霜

うつこたみまをこねる氷の所々ハ野の色そをふまう人れ  
氷をさむと暖うく並み又おりの意ハうハくうふら  
有明の月氣白くたきとくすまのうつこハおそーら  
大くのたにぬううてこのここの日暮ふ白くさゆるお  
きぬくふ別ねてぬ。おまハはあこつ。暗ちるら  
ううくここのハ日暮思まうんおまうく並みう  
意ゆりしたりたねうーまねふゆ。氷涼きまの人の足  
介ぬこれハままのまこぬふうううくおまー庭の白  
ぬうて氷ねる上ふおくまそハまふぬてそあ申こく  
おまこままのまをわけくれハお祝うそおまう申く

曙霜

朝霜

深夜霜

庭霜

行路霜

野径霜

古寺霜

氷

何處も氷凍のうふ山すのあつきたまやわんうら  
やうあそらこハまたあまこあこハ流れやらず氷もむれハ  
ぬくのうきわんーたのうらーおまぬ氷のまのまら  
わらそくの冬の持ひのあつ氷ねこぬておてるまら  
わらそくはまのそんまらうん氷の上ふとちらぬふら  
くこあそはぬののまをうすまふらつむすうん梅の房ら  
吹よすお風のこのまのいろくを村こふくハ池のうす  
ぬあふこむうくぬのまぬまをこぬふうまぬおぬ  
ぬれてほまきぬのうーつんお風ふゆて氷こぬまをこ  
ぬの書うらうぬ葉をうくこれハ氷のふの氷まうら

薄氷

厚氷

氷遍

硯氷

軒氷

庭氷

池氷

沼氷

浦氷

山川氷

氷結落葉

諏訪少く

寒草

雪つらゝる氷のつらゝりつらゝるてくゝてハチツクテツラツク

チツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

ツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツクツク

野寒草

寒樹

霞

庭霞

屋上霞

篠霞

水鳥

草より草より草より草より草より草より草より草より

樹より樹より樹より樹より樹より樹より樹より樹より

霞より霞より霞より霞より霞より霞より霞より霞より

庭より庭より庭より庭より庭より庭より庭より庭より

屋上より屋上より屋上より屋上より屋上より屋上より屋上より

篠より篠より篠より篠より篠より篠より篠より篠より

水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より

水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より水鳥より

水鳥多

池水鳥

霜夜水鳥

川千鳥

細代雪

雪

雲催雪

雨成雪

雪のふはためまらたをのさうつらつ垂ひてむれあそぶらん  
 こぼりゆくあめすうつらめをうらひきりより後、池のをこい  
 めるハ氷うのなふくまぬりてまのふやぬたさよわらん  
 あらうや川ちよのちよこま冬うれてくまぬき月ふちうちこ  
 月影のあらまねろよあら川の岩はよるまむせよなるよ  
 あらあおいさよよはぬよひをぬきあやよひをを争よ  
 おの色のうくれさうてけくふはさぬきにおぬりちよこ  
 雪うれは後ハこけぬらんそよあひひらそや清めうらん  
 西ふうきそゆあかくきとてさよふたれう風ハこころ  
 よさきたるなふをくつらぬるようきさうらうつてハ

待雪

初雪

雪遊

雪中行客

雪意及酒

朝雪

山館朝雪

岡雪

浦雪

こそれらうきめらきハきんぐれと雪よやなるためりまが  
 いさこいさやめまねハ時ぬま目さふ思あうらひたやま  
 わらそハなきさふらむ雪やらふいさハ存まあす門控いで  
 おめらるる雪うもたらひさうとハ独の白さハねあさうゆ  
 けちよほあててあてこもたよちうつらふつら雪の白き  
 今ぬらわらぬたきそくもよ日ひたつる雪やうらん  
 つらんとたぬひものをううたれてあらまたりよ雪のぬす  
 のうそたにうさやうして山さくのぬのさきハ一束ねてみつ  
 らぬそらのさきそ人をとてたられたうひの雪よ園ハまられと  
 雪のまはあはらひにぬてまほひらさうちたたらま雪の浦浪

河添雪

竹雪

雪折

行路雪

雪中路

雪中雪

木曾路よ

雪中眺望

雪中月

冬つらくゆねる雪川をみせめてくぬまてうつめれゆり

雪つゆの雪の雪行をくられとすう拂りんをねたすれ

山ねはくきようらささるぬらう思ひたうぬ枝の雪をれ

せはりのるふんあきと意あふんねえん雪守の雪をりぬ

きほひつゝ雪んんいさやきこるふらうう一脱せうの申え

雪よれハ細くいさくも多てあうハるのいさくそあま

はつらうらめ白きうたうらううてうて雪のさやこふせぬ

木曾路の花と雪をみよつれと雪のくきこよふ仙りらる

雪んんて雪るぬ日の雪ようそいさやうふうりなれぬる

たわらく雪のうすみをゆく月の新ぬぬふ雪ハうりはく

雪中氷

雪中鳥

雪中獣

月雪花の三百首を三日ふゆをうらる雪の歌と

よくうし雪の足踏今ぬえれハ雨くそ氷りともちとる

あまするハ中の鳥うたうやうの雪みねくらん出てもうら

雪つゆるあうのるをぬゆけハいぬのこちうてあふんえし

月雪花の三百首を三日ふゆをうらる雪の歌と

風雪のさうく時ぬのぬまうてぬてハはくそ初雪のそら

時ぬよりこそれあうれとやううてあゆ雪ハりゆそい

山風の吹くゆきこもるこもるこもるこもるこもるこもる

よひの雪のあらハ雪ふちうぬぬあふんぬらたぬぬぬぬ

たき出てるの雪あうれハいさくこもるこもるこもるこもる

あらまにあらハハ雪のうらうせ雪のぬぬぬぬぬぬぬぬ

うち掛ひくつ申くく身さへつてきふちうきよ  
 いづれらむそのたさうのうけふねむねのあつききのおきり  
 川きよのまほのうさううさうてはくふあふうむゆきのお  
 きいひちほりうきよのうけとれつてきよの果のうけ  
 ぬつみきたする人のきの日うひきむのたひうけきや  
 八百日申く後の白雪をほえてはるまきくちうきよ  
 時のちふさふさうて山やハ申きけそきのちうひあうき  
 あをきくきさうふあへく午さるやきよのうをさへんたひきす  
 あさるのトサすころんぬるよふとよりきよのうむらむ  
 白雪のきさうくきよの月氣いよまそゆきさゆきさ

峯炭竈

雪中炭竈

衾

山家衾

向爐火

こわくせいとさうくそ烟うつきのらつこふ人のすむらむ  
 風あれてきのむらうくもさわく時ぬらきのをきさる  
 一平のおのあをたれくれくの冬暖ふのきさるありさる  
 きふらそそたらぬ夜ハ清えられちうれ女ハうらうらつ  
 けそらのあをさうられて炭竈のたうみの燭さくさる  
 きうれいさうさうて山うらうらふれさくらくさきのさる  
 きよとあハ一人そたれよあうらぬ人を寝ふてはすの  
 あつうらぬまきよておきささうのたさきのことをわがうら  
 山衾ハさき火のさふさふさうのさきさてぬさうのさきさ  
 祢られぬさきさふさきの時りうてむうさ火をけとまさとあうら



歳暮依人

老人歳暮

歳暮言志

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

市歳暮

家々歳暮

旅歳暮

冬眺望

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

冬函栖

朝寒風

冬嵐

冬曙

深夜苦寒

冬鳥

冬木

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて

あくれの東ふくくむとする年の暮小雅はみて



字  
孫

孫

不  
亦  
自

一  
孫



三  
五

